

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 380 回 いざとなった時の準備、あなたは万全ですか？

2010.8.29

今、混沌とする世の中で、将来、いつ、突然として何が起こるか予測しづらい時である。いざとなった時に、可能な限り「自分のことは自分で守る」というのがリスクマネジメントの原点である。特に事業経営上のリスクは、自らの原因になく、全く外部的要因で危険が降りかかってくる。そんなリスク回避について、少し考えてみた。

リスクを構成する要因には3つあるといわれている。 **ペリル(Peril)**、損害を発生させる原因。例えば、火災、地震・台風等の天災、自動車事故。 **ハザード(Hazard)**、損害の発生の可能性を高める(助長する)状態。例えば、劣悪な労働衛生環境、脆弱な内部統制。 **エクスポージャー(Exposure)**、損害を受ける可能性のある対象。例えば、建物・設備、現金、従業員、資産、信用、特許・営業権等の人的・物的資産、金融資産、知的財産権等の要因が重なって、損害が発生する。

それによって引き起こされる、事業経営上予測されるリスクとは、たとえば...

経済や金融市場の動向によるリスク(主要市場における景気動向、ハイテク市場における変動性、為替動向、金利変動、資本市場の動向等)、円高や株安の動向は、正にこの現象である。競合他社や業界の動向によるリスク、すぐそばに新しい同業者がオープンしたなんて例であろう。自社に関係なく取引先が倒産、条件変更など、調達、提携、アライアンス、技術供与に関するリスク。公的規制(官製不況)、政策の廃止・変更によるリスク。製品やサービスの欠陥や瑕疵、情報セキュリティ、プロジェクト管理、投資判断、知的財産、人材、環境、信用リスク等に関するリスク。自然災害や突発的事象発生のリスク。経営者トップ、役員の病気、傷害、死亡。従業員の就業放棄、長期化する労働争議。従業員の想定以上の退職。納税思想の相違による過大な追徴課税等税務に関するリスク。等々10例ほど、考えてみた。

これらリスクの回避を対策するのがリスクマネジメントである。まず、リスクを保存しながら、社内体制の改革 & 内部監査の徹底等内部**リスクコントロール**で予防、回避を準備する方法である。たとえば...

日本版 SOX 法 ~ 内部統制(業務の適正を確保するための体制を構築していくシステム)。コンプライアンスルール(**企業倫理規定**)の確立。 **ISO** の取得(**PDCA**(Plan-Do-Check-Act)サイクルの確立)。個人情報保護規定の策定等。更に **BCP**(Business Continuity Plan)や **BCM**(Business Continuity Management)等の事業継続計画の立案等であろう。

そしてもうひとつのリスク対処策は、リスクが実際に現実化した場合の損失補償を準備する**リスクファイナンス**の考え方である。リスクファイナンスでリスクの移転を図る代表例は、**生命保険**(社長、経営幹部の死亡、退職、従業員の退職金準備)。将来の備えというと身近な手段として貯蓄があるが、預貯金では、万一のときも自分が積み立てた総額しか返ってこない。しかし、生命保険では、積み立てた額に関係なく、必要な保障額を受け取ることができる、リスクの移転である。**損害保険**(火災等災害の損害保険、従業員の傷害、怪我等の通院・入院、営業保障、交通事故、旅行等傷害等)。**公的対応** ~ 小規模企業共済、中小企業倒産防止共済制度(経営セーフティ共済)、中小企業退職金共済制度(中退金)への加入と考えられる。

いつ起こるか判らないリスクへの対応は、中々腰が重いものがあつた。が最近、危険回避の関心は確実に高まっていると思う。自分なりの、自社なりの対策準備は、いよいよ、必須条件となってきた。